## スクールカウンセラーから見たコロナ状況での学校

Schools in the Time of COVID-19 from the View of School Counselor

講演者：
　那須　里絵（ICU教育研究所助手・東京都公立学校スクールカウンセラー）
　木村　能成（ICU教育研究所助手・埼玉県スクールカウンセラー）

日　時：2021年1月26日（火）　10：10～11：20　（PSY272「教育相談」内での公開講演）
場　所：ZOOM
参加者：74名（受講生以外の学生、職員数名を含む）

　コロナ状況が，生徒，保護者，教職員にどのような心理的影響を及ぼすか，スクールカウンセラーの観点から講演した。こうした状況下で，スクールカウンセラーがどのように対応したかについて，個人情報に配慮した架空事例の形で呈示した。

　那須は，コロナによる学校（子ども・教員）の変化とスクールカウンセラーの支援の実際に焦点づけ講演を行った。学校の変化については緊急事態宣言が発令された直後から，本講演が実施された1月下旬までを4期に分類し，各時期によって子どもや教員に生じている変化を事例を取りあげながら説明した。一方，スクールカウンセラーの支援の実際については，①心理学の知識・技術をどう伝えるか（在宅勤務中に考えたこと，実行したこと），②心理学の知識・技術をどう伝えるか（学校での勤務が始まって考えたこと，実行したこと），③その他考えたこと，という3点から説明した。参加者からは，スクールカウンセラーはコロナ状況で様々な制約がありながらも心理的支援を途切れさせないように工夫していると感じた，児童生徒を支える教員や教員を支えるスクールカウンセラーにも支援が必要であると感じた，といったフィードバックが得られていた。

　木村は，今年1年間を振り返り，子どもや保護者，教職員との関わりについて考察し，発表した。事例を用いて，コロナ状況が子どもや保護者に与える心理的影響について，スクールカウンセラーの観点から理解したことを参加者と共有した。まず，現状の課題として，①家庭内の緊張，不和が顕在化したこと，②ストレスや緊張が高まることにより，自分や他者の「心」に関心を向ける能力（メンタライゼーション）の低下したことを指摘した。その上で，そうした状況に対して，カウンセラーが生徒，保護者，教職員が置かれている状況，抱えている気持ちを想像しつつ関わることが，相手のメンタライジング機能（自分や相手の気持ちについて考える力）を回復させるということや，感染症に関する正確な情報収集と発信（相談窓口などの支援に関する情報）を行うことで，不安を「漠然としたもの」から「対処できるもの」にしていくことが必要であると述べた。

　この講演により，教育相談に関心のある学生に対して，スクールカウンセラーの職務を伝え，教育相談の具体像を伝えるとともに，このコロナ状況に学校がどのように対応しているかを学ぶ機会を設けることができた。また，児童生徒に限らないコロナ禍での心理的危機や，メンタルヘルスの重要性を考える機会になった。

那須　里絵 NASU, Rie
木村　能成 KIMURA, Yoshinari